

光円寺報

2010年 7月

〒679-2323 兵庫県神崎郡
市川町甘地 384

後藤明照、由美子(惟蓮)

T&F 0790-26-0162

メール kouenji_dayo

@nifty.com

<http://kouenji-hou.com/>

通信費年間1000円



浄土というのは、誰でもが本当に安心してそこに自分の身を置くことの出来る場所です。

竹中智秀

仏教徒宣言(その七十九)

今日も朝から雨が降っています。最近、雨の降り方が変わってきているようです。梅雨と言ったら「しとしと・じめじめ」というイメージがありますが、今年は「ザー・ジャァー・ドバァー」と、というような感じで降っています。だから、床下浸水があり、田んぼや畑が浸かってしまったりと、被害が出ています。そんな中、五月の田植え時の、あのひよろひよろの苗が分けつをし、青々として田んぼを埋め尽くし始めています。いのちは、生きよう生きようとしています。

そんないのちが、生き生きと光かがやく「場」を仏教では「浄土」として表現されています。例えば「仏説阿弥陀経」の中には、「池中蓮華 大如車輪 青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光・・・」(池の中の蓮華、大きき車輪のごとし。青き色には青き光、黄なる色には黄なる光、赤き色には赤き光、白き色には白き光あり。)と説かれます。このように「浄土」は、それぞれが、それぞれのままに光かがやく事が当たり前の世界だということです。それは、私が「浄土」に往って光かがやるのではなくて、私が生き生きと自分を生きている、その「場」・「所」が「浄土」として開かれてくるのでしよう。浄土の門は「広開浄土門」(善導大師) 広く開かれているということ。誰にでも、総ての人に、開かれている。だから、私の所に「浄土」が開かれて来るのです。

その浄土は諸仏に褒め讃えられていると阿弥陀経に六方段として説かれています。六方世界(東・南・西・北・下・上)で世界全体を表わし、その全ての世界にはガンジス河の砂の数ほどの無数の仏たちがいて、阿弥陀仏の浄土の素晴らしさ、功徳を繰り返し、繰り返しほめたたえ(称讃)ているの

です。

この阿弥陀経の六方段には、それぞれ最初にその国を代表するような仏名を具体的に挙げています。その仏名は仏のはたらきを現わしています。例えば「須弥山」(世界の中心にそびえ立つ山・ヒマラヤ)のような相(すがた)や大きさや光りや燈(ともしび)、だったり、そのような仏たちがいて、私たちにはたらきかけているのです。

そんな諸仏の中で「大焔肩仏(だいえんけんぶつ)」という名の仏が南方世界におられます。この仏は、大焔||大きな炎||煩惱を肩に背負って生きています。この仏は私たちに、「煩惱を自ら背負って生きる!」という生き方が在る。ということとを現わすはたらきを、名前でもって教えている仏です。ともすれば、私たちは自分にとつての厄介な煩惱は嫌ったり、捨てようと、失くす方向で生きています。そしてそれが難しく、疲れてしまいます。そんな時、この仏がはたらきかけていることに気付くのです。捨てるのではなく担えと。

このように様々な仏が阿弥陀仏を信ぜよと私にはたらきかけています。いつでも、どこでも、誰にでも。だから仏は「名詞」ではなく「動詞」なのです。

その阿弥陀仏の第一の願いは「無三悪趣」の願です。三悪趣とは地獄・餓鬼・畜生(戦争の実相)。それを無くしたいという願いなのです。憲法九条「戦争放棄」とは、まさにそれが実定法とまでなったものと言えます。この九条が多くの人々に刺繍され、敷物となって今、光円寺の本堂に現われました。昔、若者が戦地へ行くのに千人針で無事を祈った女性の心。今それは、若者を戦地へは行かせないという願いになってよみがえってきました。

南無阿弥陀仏

釈明照

仏事ミニメモ 葬儀と迷信

通夜がつとめられ、明ければ葬儀をいとなむことになりました。

葬儀とは、決して、亡き人とのお別れを告げる儀式ということにとどまりません。身近な人の死という現実を誰にもさけられない事実として真剣に受け止め、その人の生涯を偲びつつ、私たちの生きる意味を仏さまの教えに問いたずねていくという厳肅な儀式です。

にもかかわらず、葬儀(枕ぶとめや通夜などを含みます)には、仏教とは無縁で、逆に人の心を惑わす迷信や奇習などが、実しやかに行われるのを多く見かけます。例えば、魔除けと称する守り刀をお棺の上のせる、一膳飯やお水を供える、出棺に際してお棺を三回まわす、生前愛用していたお茶碗を割る、火葬場の行き帰りの道を変える、火葬場での飲食の残りはすべて置いて帰らなくてはいけない、日本酒を「お清め」と称して飲むことなどです。

また、その「お清め」ということで申すならば、ほとんどの通夜葬儀の際には、お礼状とともに「清め塩」と書かれた小袋が会葬者に渡されています。この「清め塩」で、何を清めようというのでしょうか。もしそれが、死の穢れを清めるという意味であれば、亡き人は穢れたものとなり、葬儀自体も穢れた行為となつてしまいます。生前に親しかった人も、亡くなれば「穢れたもの」として「お清め」することは、全く道理に合わない、痛ましいことです。

果たして死者は、穢れているのでしょうか。仏教では、決して「死」を「穢れ」と受け止めません。仏教は、身近な人の死という現実の中で、死という事実を静かに受け止め深く考え見つめていくことこそが、今を生きている私の生きる責任であり、また人間としての大切な生き方であると教えているのです。

大切なことは、生まれる・老いる・病む・死ぬという人間の予測できない事実として「死」を受けとめ、残った一人ひとりが生きる意味を見いだすことです。私たちは、現に風習として根深く残存している迷信や奇習を明確に否定していきたいものです。

清め塩は使いません

